



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの読書を支える総合的な図書館行政：恵庭市「読書コミュニティのまち」を事例として
Author(s)	津田，紗希子
Citation	公教育システム研究，13，23-46
Issue Date	2014-08-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56773
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA11562857_13_23-46.pdf



子どもの読書を支える総合的な図書館行政

－恵庭市「読書コミュニティのまち」を事例として－

津田 紗希子*

――目 次――

はじめに

I わが国における図書館行政の実態

II 子どもの読書と図書館行政の関係

III 恵庭市子どもの読書支援実践と図書館行政

IV 「実践コミュニティ」をつなぐ図書館行政

おわりに

はじめに

本稿は、北海道恵庭市を事例に、子どもの読書活動を支える図書館を行政学的見地から検討することで、縦と横のつながりを内包した子どもの読書支援の可能性を明らかにする試みである。

2000年の「子ども読書年」以降、わが国は積極的な子どもの読書推進政策をすすめている。背景には、不登校などにみる子どもの心の問題と読解力低下などにみる学力の問題という複合的な問題への対応があり、読書は「子どもが人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことができないもの（「子どもの読書活動の推進に関する法律（第二条）」）」として、子どもの読書支援に関する各種法案及び計画が相次いで策定されている。そして図書館は、読書の専門機関としてその働きが再び見直されるとともに、子どもの読書推進政策の中核に位置付けられている。

子どもの読書支援からみた図書館の実態をめぐり、これまでは専ら予算不足と専門職員の不在が指摘されてきた（塩見他 2006）。実質的な児童書の不足に加え、児童サービス専門職員は市区町村立図書館でわずか15%しかおらず、また、学校図書館に常駐する人の不在も問題視されている。図書整備費の完全予算措置はこのような「物」と「人」の不足に対する改善策として図書館関係者を中心に求められてきたが、事態は硬直化したままである。

こうした状況のなか、昨今の図書館研究は上記の課題を一方で指摘しながらも、その問題解決を図書館内部の空間作りや専門職員の読み聞かせ指導といった個別実践を促す側面がある。カーペットや装飾による暖かな雰囲気作り、お話会など各種イベントの実施、ブックトーク実践など、ミクロな読書支援の紹介が図書館研究の大半を占めている。しかし、前述したように図書館が子どもの読書支援全体の中核であるならば、個別図書館作りとい

* 北海道大学大学院教育学院修士課程（教育行政学グループ）修了

う閉鎖的な枠組みに留まらない支援のあり方を、より積極的に議論していくべきなのではないだろうか。周知の通り、子どもの活動領域には広がりがある。家庭、学校、地域といった多様な活動領域を、自身の成長に応じて自由に行き来しながら、さまざまな場面で読書活動に触れる可能性を秘めている。図書館は、このような広がりのある活動領域を考慮しつつ、いわば子どもの生活と成長の全体を包括した読書支援を講じていかねばならない。そのためには、個別の図書館作りを超えた体系的な図書館作り、すなわち図書館行政の検討に再度立ち返る必要がある。そこで本稿では、先進的な子どもの読書支援実践で知られる北海道恵庭市の取り組みを検証し、子どもの読書を支えていくために必要な図書館行政の視点を論じることとする。

以下では、次のような構成で論をすすめる。まずⅠでは、図書館行政に関する先行研究の検討と、わが国の図書館行政の実態を整理し、今日的課題を提示する。Ⅱでは、子どもの読書における図書館の存在意義を確認したうえで、図書館行政の関わりについて述べる。Ⅲでは、恵庭市の実践を検証し、実際に図書館行政が与えた子どもの読書支援への成果と課題を論じる。最後に、子どもの読書を支えるうえで必要な環境とは何か、図書館行政はどうあるべきかについて考察したい。

Ⅰ わが国における図書館行政の実態

そもそも、図書館行政も教育行政同様、具体的にそれが何を示すのかについて、明確に定義付けることは難しい。本稿では、図書館に関する法律や政策およびそれを実践する機関、と同義で論じていくが、ではなぜ、これまで図書館行政について十分に議論されてこなかったのか。先行研究からその実態を明らかにし、課題を提起する。

（１）図書館行政を巡る先行研究

岩崎は、読書を巡る研究は「それぞれの分野や機関が独立しておこなっているために、実験や調査の結果が結びついて、理論研究に成熟するケースがほとんどない」うえに、「文献としては、事例報告が大きな割合を占める」（岩崎 2010：75）と論じている。読書研究のこうした特徴は図書館研究にも通じており、ある図書館の実践報告や世界の図書館実践の紹介に留まる研究が大半である。それは、一方で図書館行政を巡る研究が一向にすすめられてこなかったことを意味している。塩見は、「（図書館における行政の役割や作用を）図書館行政の視点から総合的にとらえかえし、図書館をめぐる行政上の諸法令との関係をはじめ、行政組織、計画、実施等を明らかにした研究は存在しない。というより、図書館行政の範囲、構造等についてどのように定め、それらをどのような方法で分析するのかというレベルから議論を開始しなければならない」（塩見他 1988：3）と述べ、図書館行政研究の遅れと反対にその必要性を主張している。

（２）図書館行政の今日的課題

塩見の指摘した図書館行政研究の停滞は、図書館行政自体の問題、より厳密に言えば、国の図書館行政不在という事態に起因する。

現在、わが国には実に多種多様な図書館が設置されている。公共図書館、学校図書館、

大学図書館、専門図書館、国立国会図書館…などはさらに公立・私立で運営が異なり、また各図書館の設置目的や活動内容、職員の配置などもさまざまに異なっている。しかし、こうした全国に点在する各種の図書館を統括し、全体を支援する組織は現在のわが国において存在していない。つまり、館種の異なる多様な図書館は、それぞれに対応する関係法規の下、独自に予算措置や人的配置を管理し活動していることになる。例えば学校図書館は、「学校図書館法」に基づいて全国の小・中・高等学校に設置が義務付けられ、運営する各学校及び該当地域の教育委員会（学校教育）の下で、認められる範囲内で独自の活動をすすめている。また公立図書館も同様に、「図書館法」のもとに、設置主体である地域の教育委員会（社会教育）の管理下で図書館活動がおこなわれている。国として統一された図書館行政の不在とそれに関わる各図書館の自主性が、図書館行政そのものの議論を難しくさせ、今日に至っていると考えられる。

国の図書館行政不在の要因は、それぞれの設置目的並びに歴史的背景に拠るところが大きいとされているが（塩見他 1988: 67）、詳細な経緯はここでは割愛したい。重要な点は、図書館行政の検討にあたり、所管する主体との関係性に主眼を置く必要があるということである。特に、本稿の主題である、子どもの読書支援と深く関わる公立図書館と学校図書館は、それぞれ地域の教育委員会が所管することから、地域の一般行政や地域に暮らす一般市民との関係も含め、そのまちに寄り添った図書館活動が求められる。予算や人事を図書館単独で行えない以上、地域行政全体との相互理解は不可欠であり、何より図書館は、広くそのまちに暮らす人々のためのものでなければならないからである。図書館行政の今日的課題として、より積極的な子どもの読書支援をすすめていくために、図書館を所管し、読書政策を進める地域との関係を深めていかなければならないといえる。

II 子どもの読書と図書館行政の関係

ところで、「児童図書館の父」（赤星 1990: 167）として、今もって図書館史から高く評価される今澤慈海（1882-1968）によれば、図書館の最も重要な役割は幼少期からの読書支援であり、そのうえで図書館と学校との連携は必須であるという。このような今澤の児童図書館論は、自身の確立した「生涯的教育論」を基盤に、生涯的教育機関としての図書館論から出発し、読書活動による生涯にわたる人格の陶冶を目標としている。以下で、今澤の児童図書館論の具体的な検討から、本稿における子どもにとっての読書活動及び図書館の存在意義を明確にし、図書館行政との関係について論じていく。

今澤の児童図書館論は、「生涯的教育」機関としての図書館論からはじまる。今澤は、「広義的教育又は修養」は、知的側面と情意的側面の陶冶から成ると主張し、教育のあり方について以下のように提示している（今澤 1920: 1-2）。

（一）人生は無窮、人格活動は生涯的なるを以て、之が進展の手段方法たる広義の教育修養も亦生涯的ならざるべからず

（二）又人格は萬人萬具にして其形式は普通平等なるを以て之が教育は全体として部

- 分的、差別的、階級的ならず、全般的、普遍的、平等的ならざるべからず
- (三) 又人格教育は其が生涯的なる以上、出来得る限り経済的に達成せられざるべからず
- (四) 又人格活動の標目たる理想は、古今に通じ、中外且悖らざるべきものなるを以て、此教育は知新と温故とを兼ね、且内外に渉らざるべからず
- (五) 又人格に導ぶ所は自覚自定にあるを以て、之が教育は出来得る限り自発能動的ならざるべからず

つまり今澤は、人格を形成するための教育は生涯的であり、平等的形式によって可能な限り経済的に、そして自発能動的になされるべきであるとの生涯的教育論を展開したうえで、とりわけ読書活動が重要だと主張した。今澤によれば「読書は人生進展の手段の全部」ではないが、「最も重要捷徑」であり、生涯的教育の達成には「読書力の養成と相待ちて読書の趣味涵養」が必要であるという（今澤 1920 : 1）。加えて、読書習慣は「一日にして養はれず、必ず幼少の時より準備せられざるべからざる」とし、子どもの頃からの読書支援が重要であると指摘している（今澤 1923 : 3）。

このように、今澤の論じる生涯的教育論として、幼少期からはじまる「読書の趣味涵養」こそ最重要課題であり根幹であったといえるが、それを支える存在が、図書館であった。今澤は「公有或は公営に属し、公衆に対して公開せる図書館にして、最大多数の為に、其生涯を通じて、最も経済的に内外古今の良書を供給し、彼等をして各自の趣味能力に相応し、自由に閲読利用せしめ、彼等自身をして自発的に教育修養せしめ得るところなり。是れ公共図書館の解義にして、同時に其目的なり」と述べ、最も生涯的教育論を実践する機関として図書館を掲げている。

しかし一方で、幼少期からの読書支援において図書館は、学校教育と「緊密な関係」でなければならず、今澤は「学校と図書館との連絡」が最も重要であると主張する（今澤 1925）。学校教育は「生きて行く為に最低限必要な基礎」を教える役割を担い、図書館はそうして学校教育で培われた基礎を、「生涯にわたって応用する資料」を与える役割を担っているため、二つの連絡は不可欠であるという（今澤 1920 : 2）。今澤の「児童図書館論」を研究する山梨は、これを「幼少期における学校教育と図書館の水平的統合と、学校教育終了後に始まる両者の垂直的統合という二つの統合」とし、今澤の児童図書館論の特徴だと結論付けている（山梨 2003 : 70）。

すなわち、今澤によって図書館は、「生涯にわたる読書の趣味涵養」の基盤形成という大きな目標の下に位置づけられた。そして、図書館の重要な役割として「幼少期における学校と図書館の読書支援（＝幼少期における学校教育との水平的統合）」と「学校と社会の接続を意識した図書館による読書支援（＝学校教育終了後に始まる垂直的統合）」が掲げられたのである。

なお、今澤は「水平的統合」および「垂直的統合」に加えて、学校図書館についても「学校設備の不可欠の要素」と主張する（今澤 1938 : 1765）。その理由として、一つには、教室内で受ける授業だけでは必要な教養は不足すると考え、教室外でも補充される必要が有

ると考えたため、二つ目は、繰り返しになるがこの時期に「読書の趣味涵養」が目指されるべきであると考えていたため、三つ目は、教師一人に対して児童生徒が多く、それを改善する方策として学校図書館の提供が経済的にも時間的にも有効であると考えていたため、であった（國枝 2006：40）

「幼少期における学校と図書館の読書支援（＝幼少期における学校教育との水平的統合）」と「学校と社会の接続を意識した図書館による読書支援（＝学校教育終了後に始まる垂直的統合）」という二つの概念、さらに学校図書館との協力体制が不可欠とする今澤の議論は、本稿の課題である個別の図書館作りという閉鎖的な枠組みを超えた図書館体系の再検討においても、重大な視点を投げかけている。

Ⅲ 恵庭市子どもの読書支援実践と図書館行政

さて次に、より実践的な図書館行政を検証することで、子どもの読書を支える総合的な図書館行政の構築に向けた視座を得たい。本稿で取り上げる北海道恵庭市では「読書コミュニティのまち」を市の重要指針に掲げ、まち全体で先進的な読書支援を行っている。市立図書館を中心に、それぞれのコミュニティが実践する恵庭市の読書支援を取り上げ、体系的な図書館行政の仕組みとそれによって子どもがどう変化したのか、について考察する。

（１）北海道恵庭市の概要

北海道恵庭市は、札幌市と新千歳空港のほぼ中間に位置する中核都市である。戦後は、農業とならんで自衛隊が恵庭の経済基盤を支えていたが、1960年代頃からは多くの工場が進出し、工業のまちへと発展していった。一方で、良好な居住環境の整備もすすみ、1990年から本格化した「花のまち・ガーデニングのまち」は、いまや恵庭の代名詞といえる。こうした施策から、人口も年々増加し、現在、294.87 km²のまちに約6万9千人の市民が暮らしている。

恵庭市のまちづくりにおいて基本的な指針となるのが「第4期恵庭市総合計画」である。この計画は2006年度から2015年度までの10カ年という長期的な視点にたった基本構想を示し、5カ年を区切りに計画を推進している。計画では「水・緑・花 人がふれあう 生活都市えにわ」という理想の将来都市像実現に向けた基本目標を6つ掲げており、そこからさらに細かく62の目標に区分している。その目標の1つが、「生涯各期にわたる読書環境の充実」である。ここには「乳幼児期から生涯各世代に応じた読書環境や学習環境を充実していくとともに全市域での利用サービスネットワークの構築」に取り組むことが掲げられており、恵庭のまちづくりにおいて読書への取り組みが重要な位置づけを持っていることが伺える。

また、恵庭市の子育ておよび教育施策をより具体化しているのが、「第3期恵庭市生涯学習基本計画（2011年度～2015年度）」である。この計画は、「第4期恵庭市総合計画」の基本目標を、生涯学習の視点から総合的に推進することを目的に策定されており、ここでも「本との出会い」学び広がる読書環境づくりが基本目標として盛り込まれている。恵

庭市の子ども読書支援施策は、まちづくりの基本的な総合計画と生涯学習基本計画の両方から支えられている。

（２）「読書コミュニティのまち」の形成過程

個別具体的な取り組みを考察する前に、恵庭市が「読書コミュニティのまち」に至った経緯を振り返る。起点となったいくつかの事象について紹介したい。

恵庭市立図書館の開館（1992 年～）

恵庭の読書支援の中核となる恵庭市立図書館の開館は 1992 年。すでに市の公民館内に図書室は設置されていたが、公立図書館が設置されたのははじめてのことである。開館から 1999 年まで、貸出冊数は 33 万冊から 44 万冊に増加、貸出伸び率も 35%増と市民に受け入れられたが、その実、貸出本の半数が一般書であった。恵庭市立図書館は開館以来、読者対象として子どもへの働きかけを大切にし、育児教室や妊婦教室での読み聞かせ指導も行ってきたがなかなか効果が表れなかった。現に、0 歳から 15 歳までを対象とした児童書の貸出の 1999 年までの伸び率も 6.2%にとどまっている。もっと多くの子どもたちに絵本を届けたいという課題を抱えていた。

ブックスタートの実施（2000 年～）

ブックスタートとは、乳幼児検診で訪れた親子に絵本や図書館利用、子育て支援資料が入ったパックを手渡す活動のことである。1992 年、イギリスのバーミンガム市で生まれたこの取り組みは、本来は多文化国家のイギリスにおいて、さまざまな地域から移住してきた家族の識字問題を改善するための活動として普及した。しかし日本では、2000 年の「子ども読書年」以降、子育て支援との結びつきが強い取り組みとして、理解されるようになっていく。

恵庭市では 2000 年 12 月にブックスタートの試行実施が実現した。実施のきっかけは、「中島さん、赤ちゃんを図書館に連れて行くことはとても勇気のいることなんです。いつ泣き出すかハラハラしているのです。」という、若いお母さんからの問いかけだった。2000 年 4 月、恵庭市立図書館長に着任して間もなかった中島興世氏は、「子ども読書年」のためにおこなわれた市立図書館でのイベントに参加した際、恵庭で子育てをする若いお母さんに、そううたえられた。その言葉を聞き、「将来の日本を背負い、毎日言葉をいくつも覚えている赤ちゃんにこそ図書館は開かれているべきではないのか。」と強い憤りを感じた中島氏は、「baby friendly library=赤ちゃんに優しい図書館」を提案し、具体的な施策につなげていこうと模索するなかで、ブックスタート活動に着目した。中島氏は、「赤ちゃんの体が育つためにミルク、母乳が必要なと同じように、赤ちゃんの心を育てるには話しかける、読み聞かせることが必要だ」というシンプルなコンセプトに惹かれ、恵庭市での実践を提案した。

当時、すでに東京都杉並区も実施していたが、「子ども読書年推進会議」の議員たちが場所を杉並区から借りておこなっていたものであったため、自治体としてブックスタートに取り組んだのは全国で恵庭市がはじめてであった。なお、現在ではブックスタートを実施

する自治体が、882 市区町村となっており、年々増加している¹。ブックスタート事業は恵庭市民、特に子育て中のお母さんから高く評価され、翌 2001 年 4 月から完全実施となった。

ブックスタート事業の成功体験から、図書館は公的なサービスを公平かつ全市的に展開していくことの重要性を学ぶ。従来の図書館は来館者に対する館内サービスを基本としている。恵庭市立図書館も同様に、来館できない人たちへのサービス展開を大きな課題としていたが、ブックスタートによりはじめてその年のすべての子どもたちに公的サービスを届けることができた。その結果、児童書の貸し出し率も大幅に伸びていったのである。図書館は、公的な読書サービスを子どもたちに公平に届けることの必要性和、乳幼児への支援が受け入れられてもさらにその先につながっていかないと意味がない、という思いから、次第に義務教育段階の子どもたちへの支援、つまり学校図書館の充実について考えるようになっていく。

「わかくさマザーグース」の取り組み（1997 年～）

そうした図書館の活動とは一方で、ブックスタート実施以前から、学校図書館の環境整備に向けた取り組みは動き出していた。1997 年、恵庭市立若草小学校で学校図書館ボランティア「わかくさマザーグース」が発足。「わかくさマザーグース」は、子どもを若草小学校に通わせるお母さん方によって構成された、学校図書館支援のボランティア団体である。当初は児童への読み聞かせを中心に週に 1 度活動していたが、徐々に学校図書館そのものの整備にもかかわるようになっていく。発足から 2 年目に参加した平井立氏（現・ブックスタートボランティア「えにわゆりかご会」の事務局長）によれば、小学校で本の読み聞かせをしていた当時、学校図書館は暗く、また、本も古く傷んだものばかりでひどい状況だったという。せっかく新しい本が入荷しても司書教諭が忙しくて整備できない様子を見て残念に感じ、読み聞かせだけでなく、本の整備も手伝うようになった。週に 3 日ほどのペースで、学校図書館の本の修理や廃棄本を点検し、学科ごとに並んでいた蔵書も、子どもたちの市立図書館利用を考えて同様の配架に並べ替えた。カーペットをひいたり、図書館内に装飾を施すなど、居心地のいい学校図書館を目指し、およそ 3 年半で学校図書館の整備を終える。こうした活動が評価された若草小学校は 2000 年、文部省の委託事業のモデル校に選ばれ、市と道から補助金を受けるが、平井氏は、「うちの学校だけ良くなるのではなく、そのお金をもとにして全市的に改善しようと提案した。学校図書館整備や図書修理の講習会、沖縄から学校司書を招いての講演会、若草小学校での活動を全市的に紹介するための機関誌『この指とまれ』の発行に活用した」と振り返る。「同じ時代に同じ教育を受けているのに、教育環境や読書環境の違いが大きいのはおかしい」という思いが、一部の学校だけでなく、市内の小・中学校すべての学校図書館整備の必要性というさらに強い意識へと変わっていった。

こうした活動をすすめるなかで、やはり学校図書館には、蔵書の整備をすすめながら、子どもと本をつなぐ存在として常に人がいるべきであることを実感していく。そうして、専任の学校司書（教員とは違う学校図書館担当職員）配置を求める運動へ発展していく。

¹ ブックスタートパックを手渡すという基本的な活動は共通しているが、事務局や関係組織などは自治体によって異なる。実施自治体数は 2014 年 5 月 31 日現在。（「【ブックスタート】Bookstart」HP より）

「学校図書館を考える会・恵庭」の結成（2002 年～）

2002 年、「わかくさマザーグース」のメンバーを中心に、「学校図書館を考える会・恵庭」（以下、「学校図書館を考える会」）が結成される。会則には以下のように明記されている。

第 2 条（趣旨）

本会は、学校図書館の現状について学び、子どもたちが利用する学校図書館を少しでも利用しやすくして、本の好きな子どもに育っていくために何ができるのかを考え、行動していきます。また、多くの市民に専任職員のいる学校図書館がどう変わっていくかを知ってもらい、学校図書館に専任の職員を配置してもらうことを目指して活動します。

「学校図書館を考える会」には、学校司書の全校配置という主たる目的に賛同した現職教員や超党派の議員たちも参加し、市内の学校図書館見学や講習会、沖縄の学校図書館への視察といった活動が積極的におこなわれた。こうした学校図書館充実に向けた大きな住民運動は徐々に市を動かし、2003 年に、市内の小学校 8 校と中学校 5 校の全 13 校の学校図書館に各 10 万円ずつの予算がつく。

これを受け、「学校図書館を考える会」は、その予算を 130 万円にまとめて、全市的な取り組みへ生かすよう求めた。当時、市内の各学校図書館の状態には格差が生じていた。学校の裁量でわずかに予算がついている学校図書館もあれば、ボランティアがいない学校図書館もあった。「学校図書館を考える会」のメンバーは、そのような違った状況を抱える各学校図書館に 10 万円ずつ配っても意味がないと感じていた。そこで、130 万円を市全体の底上げとして使って欲しい、とうったえたのである。これをきっかけに、各学校図書館にボランティア団体結成が要求され、「恵庭市学校図書館活動推進協議会」が設置された。現在では、市内の小・中学校図書館すべてにボランティアが存在する。このような活動と並行して、「学校図書館を考える会」は、2002 年、2003 年と学校司書の全校配置に関する要望書も市に提出している。この要望書は、学校司書の雇用形態や研修の機会にまで言及していた。そして、2004 年 4 月、ようやく市内の小学校全 8 校に専任の学校司書を配置することが実現する。2 年後の 2006 年 4 月には、市内中学校全 5 校にも配置された。

そして、その実現の裏には、学校司書配置の少し前（2003 年 4 月）に市立図書館と学校図書館行政の一元化がはかられたことが大きくかかわっている。現実的な問題として、学校司書を配置しようとしたとき、どこが所管するのかが問われていた。また、かねてから教育委員会の学校管理課が学校図書館活動について不案内であるということが問題視されていた。そこで、学校図書館のことはすべて市立図書館へ移行し、学校司書も市立図書館職員という役職についた。ここから、学校や保育の現場なども含めた市内の読書環境整備のほとんどすべてを、市立図書館行政が担うシステムが構築されていく。

「子ども読書プラン」の策定（2005 年～）

2000 年にはじまったブックスタート事業と、ほぼ同時期に進行していた学校図書館の充実を求める住民運動を背景に、恵庭市では子どもの読書環境整備の機運が高まっていた。加えて、2002 年に国が「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（第一次）」を策

定したことをきっかけに、恵庭市においても、子どもの読書推進にかかわる基本的な計画策定に向けて動きはじめる。

基本計画の策定は、図書館を中心に、行政職員だけでなく、保健師や幼稚園教諭、町内会に企業、大学関係者といった多様なメンバーで構成された「恵庭市子ども読書プラン推進会議」によって議論がすすめられた。この間、さまざまな人たちがかわかって子どもの読書支援をすすめてきたことが、この計画づくりにもつながっていた。そして、2005年2月に、「恵庭市子ども読書プラン」（以下、「子ども読書プラン」）が策定される。当時市立図書館司書であった内藤和代氏は、「読書コミュニティ」という言葉は、「子ども読書プラン」策定時すでにあった。ボランティアによる読み聞かせ、幼稚園・保育園の読書環境整備、学校司書の配置などの図書イベントや各年代に応じた読書サービスを養分にしながら、各ライフステージにおけるさまざまな場所で、少しでも葉を広げながら「読書コミュニティ」という木を育てよう、ということの意味している。」と説明する。内藤氏によれば、「子ども読書プラン」の核は、「読書コミュニティ」という理念にあるとしている。この言葉が物語るように、「子ども読書プラン」の目的には、「ブックスタート事業や学校図書館で育った子どもたちが、それぞれの年代で誰もが等しく読書活動に楽しむことができるような環境整備を目指して、計画的な推進をはかること」と掲げられている。また、そのための目標として「つなげよう、ひろげよう、育てよう、子どもが本と出合うまち」を示している。こうして、「恵庭市子ども読書プラン」の策定により、図書館を中心にして、まち全体で子どもへの読書支援を体系的に、継続的にすすめていくことが明確に打ち出された。なぜ、恵庭市が子どもの読書支援をこのようなまちの施策として取り組むのか。図書館は、「子どもの幸せを願うことが地域社会の最優先課題であり、これを解決する手法のひとつに読書がある」という市民の声があるからです。そして市当局がそのことを認識しているためです。」と応えている。

「恵庭市子ども読書プラン」策定からおおよそ9ヶ月後に、ブックスタート事業のきっかけをつくった中島興世氏が恵庭市長に就任する。2003年から、恵庭市議会議員として活動し、学校図書館の充実についても議会で何度も答弁してきた。また、前述した「学校図書館を考える会」による沖縄への学校図書館視察にも同行している。中島氏は「子どもたちが群れて集まる学校図書館を作りたい。」これが厳しい市長選挙に挑戦した動機だ。」と後に述懐しており、以降、「読書コミュニティのまち」実現のため、市民と図書館のすすめる子どもの読書支援を、まちの施策として支えていく。

市からの理解を得た図書館は、「子ども読書プラン」のもと、就学前の読書習慣形成に向けた乳幼児期及び保育園や幼稚園などの読書環境整備、読み聞かせボランティアの育成支援などをすすめていった。特に、小・中学校の学校図書館充実に対しては、より具体的な計画として「学校図書館ステップアッププラン」を策定し、学校図書館の蔵書整備、朝読書を核にした児童生徒の読書推進、学校司書と教員の協働による学校図書館活動を支援している。また、2006年には市内の小・中学校全校の学校図書館でデータベース化が完了。これにより、市立図書館とのネットワークが構築され、図書資料の共有が可能となった。その結果、学校図書館で本を検索し、その本が市立図書館を含む市内の小・中学校のどこかにあった場合、市内全域を運行する配本車が、翌日には子どもたちの手元に本を届けるシステムが確立したのである。

以上、恵庭市における「読書コミュニティのまち」の形成過程を大まかな流れのなかで確認してきた。はじめから、まちの施策として取り組まれてきたわけではなかった。まして、行政主導による一方的な施策でもない。図書館の子どもへの読書支援に対する意識が下地としてあったものの、それぞれの場面で存在したキーパーソンが核となり、官民間問わず、また行政内の部局を超えて、さまざまな人を巻き込みながら展開されていった。「読書コミュニティのまち」形成過程の段階で、協働が原動力となっていたことは理解しておく必要がある。

（３）個別具体的な取り組み

次に、恵庭市の「読書コミュニティのまち」づくりと、その中心にある子どもの読書支援施策、そしてそこにどのように図書館がかかわってきたのかもふまえつつ、具体的な取り組み内容を検討する。読書支援にかかわった人たちの思いをつかむことはもちろんだが、できるだけ子どもたちの気持ちや様子の変化についてもとらえていきたい。

ブックスタート事業－図書館・子育て支援・保健・ボランティアとの四者協働

中島氏が図書館にブックスタート活動を持ちかけた当時、ブックスタートが紹介されてから日も浅く、まだ日本でブックスタートを実施した自治体はなかった。提案を受けた図書館職員にも戸惑いがあり、内藤氏は、「図書館は、税金で資料を収集・保存・管理をする場であり、本をプレゼントするというのは図書館の仕事なのだろうか」と当初抱いた疑念を振り返る。しかし、「ブックスタート国際シンポジウム」で報告者が発した「ブックスタートは図書館がやるべきことだ」という言葉が忘れられず、ブックスタートが読書活動推進の一つという位置づけを超えて、子育て支援へと発展していくことを感じ、そこに図書館がかかわれることに改めて気づかされたという（NPO ブックスタート 2010：98）。こうして、図書館のなかでブックスタートへの思いが共有され、実施に向けた取り組みが動き出す。

はじめにおこなわれたのが、行政部署間の連携をはかることであった。ブックスタートの主な舞台は乳幼児の検診会場、つまり保健センターである。必然的に、保健福祉分野との連携が求められた。行政の実態として、別々の部署を乗り越えて連携をはかることは難しいのが実情だが、恵庭市では、ブックスタート実施以前から図書館と保健福祉分野との連携がはかられていた。保健センター主催の育児教室で、図書館が読み聞かせ指導をおこなうといった活動は、その連携のひとつでもある。実際にブックスタートに向けた準備をすすめるにあたっても、保健福祉分野との連携は順調にすすんでいった。健診の待ち時間が長いことを気にかけていた保健センターと、多くの家庭に本を届けたいと思っていた図書館、そして開設されたばかりのセンターをPRしたかった子育て支援センターも加わり、協働の体制が整えられていった。「ブックスタートへという施策が動き出したのではなく、さまざまな課題があるなかで、ブックスタートをひとつの解決策として、関係する人や部署が連携していったことが、成功したポイント」と、内藤氏は語っている。

そして、恵庭のブックスタートの成功に不可欠なのが、読み聞かせボランティアの存在である。ブックスタート活動を生んだイギリスにおいても、絵本を手渡すだけでなく、そ

の場で絵本を開いて読み聞かせをすることを重視していた。保護者の目の前で、赤ちゃんの楽しむ様子を見てもらうことにより、読み聞かせを通した親子のコミュニケーションのきっかけづくりになることが期待されている。同様に、恵庭市においても、当初から読み聞かせボランティアが話し合いに加わり、前述した図書館、保健センター、子育て支援センターとの四者協働で準備をすすめていた。しかし、当初はボランティアとの相互理解がなかなかはかれなかった。話し合いに立ちあつた当時図書館長の中島氏も、ボランティアの方たちがブックスタートの話に集中してくれない様子に違和感を覚えていたという。何度もボランティアと話し合い、また職員から話を聞いた結果、「ボランティアさんたちがこれまで図書館主体の事業を一方的に手伝わされてきたのではないか(NPO ブックスタート 2010: 101)」、「そうした関係が続いたことで、ブックスタートには賛成でも、ああ、また私たちをこき使うのか、というのに近い感情があるんじゃないか(NPO ブックスタート 2010: 101)」ということに気がつく。内藤氏は当時のことを、「ボランティアさんは、疲れ切って不満を持っている様子だった。ボランティアさんは自分たちが楽しいからではなく、子どもと親をつなげたいという思いで読み聞かせをずっと続けてきたのだ」と振り返っている。ボランティアの思いを理解した図書館に対して、ボランティアも徐々に心を開き、ようやく、四者による協働の体制が実現。ブックスタート実施に向けた動きがいよいよ加速する。

保健師からは、「パックをただのお土産にしてしまっただけではいけない」という課題が提示され、①問診のなかで保健師が「赤ちゃんの絵本をひらく時間の意味」について話をする、②カーペットの上で親子が次の診察を待つ間に、ボランティアが実際に絵本を読んで、その楽しさを実感してもらう、③最後に図書館員が一对一でブックスタートについて説明する、といった具体的な三段階のステップが構築された(NPO ブックスタート 2010: 102)。

ボランティアからも積極的な意見が出た。「ブックスタートで絵本を手渡した後の親子へのフォローアップが、図書館にできるのか」という指摘だった。これに対して図書館は、かねてから打ち出していた「baby friendly library=赤ちゃんに優しい図書館」をより積極的にすすめることにした。図書館の入り口にベビーカーを二台備え付け、授乳室やおむつ交換台も設置した。また、児童書コーナーから赤ちゃん絵本のコーナーを独立させ、小さなテーブル、椅子なども用意して乳幼児がゆっくり本を開くことのできる環境を整えたほか、赤ちゃん向けのお話会も企画した。こうした取り組みは、一般利用者に対する、「赤ちゃんも図書館を利用しますよ」といった図書館側からのメッセージでもあった。図書館の願いが子育て中のお母さんに届き、利用が増加するが、一般利用者からの苦情は一件もなかったという。むしろ、若いお母さんや赤ちゃんが来てくれることで、図書館の空気が和らぎ、温かくなっていったと、中島氏は語っている。

ブックスタートの実施前から、四者による話し合いが重ねられ、図書館のフォローアップ体制も整われていった。そして、2000年12月、恵庭市のブックスタート活動が試行実施される。この試行は、2000年末から翌年2月までに3回実施し、アンケートの回答などを分析して終了する予定であった。ところが、実際に実施すると、お母さんたちを中心に反響が大きく、「今後も続けて欲しい」という要望が相次いだ。また、ブックスタートにかかわったボランティアも熱心に動き、市に活動の継続をうったえた。「図書館だけでは、予算を要求してもついてこなかったと思う」、こう内藤氏が語るように、ブックスタート継続

の動きが市民の間で根強いと市が判断し、予算が復活、2001年4月から恵庭市のブックスタートは完全実施となり、現在に至る。当初市立図書館の読み聞かせボランティアとしてかかわってきた団体は、完全実施により「えにわゆりかご会」と名称を変え、現在も健診会場で読み聞かせを続けている。

ブックスタートによる成果はさまざまな場面で見ることができる。わかりやすい成果として、ブックスタートをおこなっている9,10ヶ月健診の受診率が90%から97%まで上がったこと、市立図書館の児童書の貸出伸び率が6.2%から37%まで上がったことなどがあげられる。

また、恵庭市のブックスタートを子育て支援の側から研究する梶浦によれば、ブックスタートサービスを受けた家庭と、受けていない家庭で、子育てに違いがみられたという。たとえば、「お父さんは絵本の読み聞かせをしていますか」、「お子さんを図書館に連れて行くことはありますか」といった項目で、サービスを受けた家庭が優位な傾向を示し、父親の読み聞かせが子育て協力につながっていることが証明された（梶浦2005）。

加えて、ブックスタートによって、子どもたちの様子にも変化が生じている。恵庭市では、はじめてブックスタートを受けた子どもたちが2007年に小学校へ入学したのに合わせ、学校図書館調査をおこなった。すると、これまでの学年と比べ、「読み聞かせに対する集中力が高い」、「本を読む習慣が身についている」、「学校図書館への興味関心が高い」、「生活態度が落ち着いている」といった報告が、次々となされたのである。1年生はまだ学校図書館を利用できないと知って、「学校図書館に入りたい」、「本を読みたい」と泣き出す子どもまでいたという。いまでは、ブックスタート世代の影響により、ブックスタートを受けることのできなかった前の世代の子どもたちの学校図書館利用も増加している。

学校図書館の整備充実－市内小・中学校への学校司書配置

「学校図書館ステップアッププラン」

恵庭市立図書館は、「子ども読書プラン」のもと、学校図書館の整備充実に向けてより具体的な計画を策定する。それが、2005年の「学校図書館ステップアッププラン」である。

「学校図書館ステップアッププラン」の目的は、ブックスタートで読み聞かせを経験した赤ちゃんが、入学後も本に親しんでいけるように、充実した読書環境を整えることであった。つまり、せっかくブックスタートで本と身近になった子どもたちが、学校生活のなかで本から離れていくことのないように、という読書支援の継続が、このプランの基本理念となっている。具体目標として、以下の五つが示されている。

一つ目の「読みたい本がある図書館をつくります」という目標は、具体的には学校図書館の蔵書の整備を指している。当時、恵庭市の学校図書館には、昭和の本や「西ドイツ」、「ソ連」と明記された古い地図が載っている本などが、学校図書館の棚を占めていた。こうした古い本を廃棄し、子どもたちが読みたい新しい本をそろえることから始めた。単に蔵書の増加を目指すのではなく、子どもたちにとって魅力的な学校図書館づくりを目指して、「量的な整備から、質的な整備」の推進をすすめた。

次の、「2.学校ぐるみで読書活動を推進する体制をつくります」という目標では、学校全体で読書に対する意識を高めていくことの必要性が示されている。学校図書館はあくまで学校という組織のなかの一部である。学校で教育活動をおこなう教職員が、恵庭市の子ども

もの読書に対する意識を理解し、学校全体で学校図書館を支えていくこと、さらに子どもの読書活動を支援していくことが重要である。当時すでに恵庭市長であった中島氏は、「1人や2人で学校を変えようとしても容易ではない。しかし、4人が同じ夢をもって努力すると変化を期待できる。」と考え、2007年、市の予算で、市内の各小学校から4名、全8校で35名の教員が、先進的な学校図書館実践で知られる山形県鶴岡市の朝暘第一小学校へ視察に行った。視察で素晴らしい学校図書館活動を目の当たりにした教師からは、「目からうろこが落ちた。必ず私たちの学校を日本一の読書の学校にします。」という言葉が返ってきたという。その翌年には、朝暘第一小学校の専任学校司書として活躍した五十嵐絹子の講演会を全教職員対象に開催し、さらに、司書教諭と学校司書による合同研究会なども現在まで継続して実施している。また、恵庭に新しく来た教員には、図書館が制作した子どもの読書支援に関する啓発パンフレットを渡すだけでなく、必ず市立図書館でガイダンスを受講してもらうことになっており、学校全体での理解に努めている。

三つ目の「読書ネットワークを育て、図書の共有化をすすめます」という目標に関しては、市立図書館を中心に、市内の学校図書館の蔵書の共有が具体的にすすめられた。「学校図書館ステップアッププラン」の策定からおよそ4ヶ月後、2006年3月に市内小・中学校すべての学校図書館のデータベース化が完了する。これにより、市内全域の学校図書館の蔵書状況が、市立図書館だけでなく各学校図書館においても、一度に確認することができるようになった。さらに2007年7月には市立図書館と学校図書館を巡回運行する配本車が設置され、完全な図書資料の共有が可能となる。内藤氏は、「市立図書館から遠い学校にいる子どもたちは図書館の利用が減る。でも、学校図書館で蔵書検索するとほかの学校と市立図書館の貸し出し状況が見れるので、そこで予約できる。遠くの子どもたちにも次の日には市立図書館の本が届くという状況が出来たので、このネットワーク事業が学校で最も喜ばれた事業です」と分析する。

市立図書館のデータによると、配本車による図書資料の共有ネットワーク構築後、市立図書館から小・中学校への貸し出しは、2005年度から2008年度までで18,018冊－14,282冊－18,519冊－13,978冊と推移し、学校間貸し出し冊数は、96冊－205冊－1,277冊－2,987冊と推移している。図書館は、市立図書館からの貸し出しが減少している要因に、各学校図書館費大幅増額による蔵書充実をあげている。学校間の貸し出し冊数が増加している背景には、たとえば調べ学習などで一つの教材を複数冊そろえたい場合に、各学校図書館から集めるケースも多いようである。

4つめの「寄付が大きく活きる仕組みをつくります」という目標には、昨今の厳しい財政状況が関係している。恵庭市は、「子ども読書プラン」策定直後、学校図書館の蔵書整備のために、各学校に大幅な予算措置を講じる。小学校で通常の4倍、中学校で通常の2倍の予算をつけ、大規模校には250万円ほどの予算措置をした。市立図書館分館（恵庭分館、島松分館）の運営予算が各館180万円ほどであることから、この予算措置がどれだけ特化しているかがわかる。

最後に、「学校図書館専任職員を配置します」である。繰り返すが、恵庭市では市内小学校全8校に、市内中学校全5校に、専任の学校司書を配置している。北海道で恵庭市以外に専任の学校司書を配置している自治体はない。恵庭市の学校図書館充実において、学校司書の果たす役割は極めて大きい。蔵書の整備も、学校のなかでの読書推進も、図書共有

のネットワーク活用も、専任の学校司書が学校図書館に常駐していなければ、実現できなかったと思われる。

学校司書による学校図書館活動

恵庭市では、学校司書の採用に際し、図書館司書資格または司書教諭資格の取得を条件としているため、恵庭市の学校司書は、専門的な知識を持つ職員である。また、特別な事情があれば異動もあるが、基本的には一度赴任した学校に長くいる。

学校司書は学校図書館活動にかかわる業務のほとんどを担当する。窓口業務全般をはじめ、図書室内の展示・装飾、購入図書選定・予算状況の把握、授業支援、図書ボランティアとの連絡調整、市立図書館・他校図書館との連携、学校図書館関連行事の企画準備などである。学校図書館運営にあたっては、学校司書のほかに、校務分掌として学校図書館担当を割り当てられた教員が協力しておこなう。学校図書館担当は司書教諭資格の有無は要しない。実際に、調査した3校の学校図書館のうち2校の学校図書館担当教員は司書教諭資格のない教員であった。なお、司書教諭とは学校図書館の専門的職務を担う教員であるが、実際には学校図書館担当として配属されていない司書教諭がほとんどである。

学校司書の配置により、恵庭市の学校図書館の環境は整備充実され、さらにそこでの活動はより豊かなものへと発展していった。ここでは大きく三つに分けてその成果をみていきたい。

まず一つは、子どもたちへの図書館利用の促進と丁寧な読書案内の実現である。恵庭市の小学校では、各学年の4月から5月にかけて、学校図書館の利用指導をおこなう授業時間が設けられている。主に国語の授業を一時間もらい、学校司書が学校図書館での利用を指導する。子どもの成長にあわせ、指導内容を変えている。恵庭市立島松小学校の学校司書である中山氏は、借り方は低学年のうちに指導し、高学年では発展的な図書室の利用方法を指導する。さらに学年が上がると、辞典には目次・索引がある、という指導へ発展する。また恵庭市立恵み野小学校学校司書の吉田氏が図書の分類表の見方を2年生から指導するのは、学校図書館の図書の場所を覚えるのではなく、分類で覚えてもらえれば、市立図書館やどんな図書館に行っても、自分の読みたい図書資料を探せるようになるからだという。

分類表の見方を含む図書館の利用指導は、恵庭市の全学校司書の通常業務として位置づけられている。その学校の学校図書館の利用促進だけでなく、今後の図書館利用や、興味のある事柄を調べるための方法なども見据えた指導がなされている。また、子どもたちへの積極的な読書推進として「読書月間」を設け、学校図書館関連行事を企画している。読書月間は、期間やその内容は異なるが、恵庭市の小・中学校で共通して設定されており、各学校でさまざまなイベントが実施されている。「読書月間」でのイベントは、教員からの反応も良く、特に、本を修理する体験学習は今後も継続しておこなって欲しいといった要望が出されたという。このほか、ボランティアと協力しておこなう読み聞かせ活動や、学校図書館内の季節ごとの装飾、本を使ったクイズやゲームなども企画し、常に子どもたちを飽きさせない学校図書館づくりを心がけている。そして、こうした活動の基盤には、普段からの丁寧な子どもへの読書案内がある。恵庭市立松恵小学校学校司書の松田さんは、「毎日図書室に通う本好きな子と、あまり図書室で見かけない子、貸し出しの少ない子の

差が顕著になってきている。少しずつ対応を考えているところ。」と話す。また、島松小学校学校司書の中山さんも、「何を読んでいいかわからず、ずっと悩んでいる子どもたちに声をかけるようにしている。それによって、本が好きになるか嫌いになるかが変わってしまうと思うので。「カブトムシが好きなの?」「こんな本があるけどどう?」など、お話ししながら紹介しています。本を返すときに「おもしろかったよ」と言われると、「ああ、すすめて良かったな」と思いますね。」と話す。

常に子どもの様子を気にかけ、読書に対する子どもの思いを察知し、楽しく会話をしながらその子の好きそうな本を紹介する。これは、「良書を読むべき」、「本はこうやって読むべき」といった読書指導ではない。まさにその子ども一人一人と向き合い、子どもそのものを受け止め、その子に合った本を提案して読書の世界へと導く、読書案内なのである。教科学習やクラス担任といった業務を抱える教員には、これほど丁寧な読書案内の実践は難しく、学校司書ならではの活動である。

こうした学校司書による支援は、子どもにとどまらず、教員への支援にもつながっている。これが、二点目の成果である。恵み野小学校の飯坂教諭は、「他市から恵庭に来て、資料がすぐに集まると感じた。他市では自分一人で夜間に市立図書館へ行き、すごく苦労した。学校司書の授業支援があるだけで活動の幅が広がり、余裕が生まれる。どのような学習につなげていこうということまで考えられるので、集めるだけで精一杯だったときより、授業に集中できる」と、これまで赴任してきた他市町村の学校と恵庭の学校図書館との違いを語り、学校司書の授業支援によって、自身の描く教科学習がより豊かなものへと発展していく実感を得ている。これまで、学校図書館の図書資料の活用は、基本的に教員一人の手に委ねられていた。「総合的な学習」やそれ以外の教科における調べ学習などでも、どのような図書資料を使うか、どこで集めるか、何冊そろえればよいかなどのすべてが、それを実行しようとする教員にかかっていた。こうした負担が、学校司書の配置により大きく軽減されたのである。恵庭市のすべての学校図書館では、教員が学校司書に相談をし、それを受けた学校司書が、市立図書館や他校の学校図書館から図書資料を集めるシステムが構築されている。また、学校図書館の蔵書の選書に関しても、学校司書は子どもたちからだけではなく、教員からもリクエストを募っている。

また、飯坂教諭は、学校司書が図書館にいることの意義を教員の視点からこう評価する。「子どもたちにとって教員は、“本をたくさん読んでるか読んでないかをいつも見ている人”と思われている。学校図書館に常に人がいるだけで、子どもたちの大事な居場所になっている。「学校のなかで一番好きな場所は?」と聞くと、図書館と体育館が最初にあがるほど」、教員である自分を子どもたちがどう見ているのかを分析したうえで、だからこそ、「(評価をすることのない)学校司書の配置はすごく重要」だと語る。

子どもたちの居場所づくりは学校司書も意識している。「図書館に来てすごく話しかけてくる子がいるので、家でお話を聞いてもらえていないのかと心配になり、養護教諭とカウンセラーに相談したところ、一人親家庭のためなかなか家庭で話を聞いてもらえないことがわかった。」と恵み野小学校学校司書の吉田さんは、実体験を振り返り、「本来の仕事かわからないが、学校図書館が逃げ道なればいいと思っている。子どもがつらいとき、特に何も言わなくても、気持ちに安らげる場所でありたい。」と語る。教員でもない、友達でもない、でも黙って話を聞いてくれる、楽しくお話をしてくれる、最も身近な大人として、

子どもたちのなかで学校司書が存在している。本を媒介にして自分のことを話せる空間が、各学校図書館に用意されていることは、子どもたちにとって大きな支えとなっている。

松恵小学校の樋口校長は、恵庭市の学校司書についてこのように総評している。「一番驚いたのは子どもと本の関係がとても近いということ。スクールバスで通っている子どもたちは、小脇に本を抱えて乗ってくる。本を読むことがすごく自然な活動のようだ。課題はあるけど、全体としてはある種理想に近い状況にある。それは学校の先生だけでは絶対に実現不可能。学校司書がいて、連携を取りながらやる以外には実現できない。」

常に人のいる居心地のいい学校図書館を基盤に、恵庭の子どもたちと読書の関係はいまより親密なものとなっている。

（４）図書館行政の一元化

このような、学校司書による安定的な学校図書館活動の充実、市立図書館からの支援によって成り立っている。

学校司書による教員への授業支援も、市立図書館からの支えが大きく関係していた。それは、各学校図書館と市立図書館の蔵書管理をオンラインでつなぎ、ネットワークシステムを構築するといった物的整備にとどまらない。何か図書資料を集めたいときに、パソコン上で相談すると、各学校図書館の学校司書及び市立図書館の職員から、すぐにアドバイスもらえる体制が整っているのである。たとえば、教員から頼まれて授業にかかわる資料を集める際、パソコンに「小学５年の社会科でお米作りをテーマにした授業をしたいので、それにふさわしい資料を」と入力すると、すぐに市内の全学校司書から答えが返ってくる。その返事を参考に、パソコンで集めたい資料の申請をすると、配本車が２、３日以内に届けてくれるのである。また、最近では、「図書課」というフォルダが各学校図書館のパソコンの画面上に設置された。このフォルダのなかには、どんなテーマの授業でどのような図書資料を使ったのか、その本のバーコードやどの学校図書館に入っているかといった情報が「調べ学習シート」という一覧表になって入っている。全学校図書館と市立図書館がメールでつながっているため、何か細々とした情報のやり取りが気軽におこなえることも学校司書から好評だ。市立図書館による学校司書支援は、オンライン上だけではない。月に一度、学校司書と市立図書館職員が一同に集まり、直接顔を合わせるミーティングを開催している。また、月に一度のミーティングのほかにも、司書教諭も交えた研修や勉強会などが定期的に催されており、ほかの学校図書館への視察なども実施されている。

このような市立図書館からの、学校司書については学校図書館活動への支援体制は、図書館行政が一元化されたことと密接に結びついている。恵庭市では 2003 年、学校司書の全校配置をきっかけに市立図書館と学校図書館行政の一元化がはかられた。そのため、学校司書による各学校図書館での活動を、市立図書館がとりまとめることが可能となり、それによってスムーズな情報の共有や研修の支援などが実現している。

学校図書館は本来、学校教育施設の一部であり、所管するのは教育委員会の学校教育部局である。一方、市立図書館は、同じ教育委員会でも社会教育部局が所管する。それを一元化するということは、全国でも希有なケースである。内藤氏は、「市立図書館と学校図書館が一元化され、学校図書館の仕事を市立図書館で受け持つことになったのが大きな転換点。ここから「子ども読書プラン」や「学校図書館ステップアッププラン」の策定につな

がった。」と分析する。

図書館行政の一元化による成果は、学校司書への支援体制にとどまらない。学校図書館ボランティアを含む、市内の全読書関係ボランティアも市立図書館を中心にまとまっている。2007年の時点で37団体、およそ400名から500名のボランティアが市立図書館に登録されていた。このように、市内すべての読書関係ボランティアの事務局を市立図書館が担うことにより、ボランティアを必要とする各種団体、施設からの要請を、図書館を通して各ボランティアに連絡できる体制が構築されている。

恵庭市は、活動費として各ボランティアに年間3万円の予算を拠出しており、その活動はそれぞれの自主性を尊重しておこなわれている。市立図書館は、年に一度市内の全読書関係ボランティアを集めて、情報共有や活動報告をする連絡協議会を実施している。島松小学校学校図書館ボランティア「たんぼぼ」代表の早川氏によれば、各学校や市立図書館にはたくさんのいい絵本や紙芝居があり、こうした財産を貸し借りできるようなシステムが作れないか検討しているところだという。連絡協議会が、次のステップへの発展を後押しする場として機能している。

このほか、恵庭市内における私立幼稚園の読書環境も図書館主導で支援している。恵庭市には幼稚園が8カ所設置されているが、そのすべてが私立、つまり民間が運営している。しかし、子どもの読書活動の大切さは、民間と行政といった枠組みを超えて共有されている。私立恵庭幼稚園園長井内氏は、「ブックスタートから小学校入学までの間、どうしても行政と絵本や図書とのかかわりが空いてしまう。せっかく生まれたときから恵庭市の子どもは豊かな読書環境のなかで育って欲しい、という願いがあるのだから、私立の立場であっても、同じ恵庭市の子どもを見るものとして、できるところはサポートしていきたい。そうすると、行政との連携、図書館との連携は必然的なものなのではないか」と語っている。

このように、恵庭市の「読書コミュニティのまち」づくりに共感する私立幼稚園への支援も図書館は重視している。恵庭市では各園に10万円ずつの予算をつけて、毎年本を配本している。また最近では、参観日を図書館で実施する幼稚園も増えている。参観日を利用して、幼稚園に通う子どもたちとその保護者が図書館を訪れ、ボランティアによる読み聞かせを受ける。多くの人が、そのまま図書館で本を借りていくという。子どもたちにとって、楽しい本との出会いの場となるほか、両親と幼稚園の先生以外のはじめての大人とのふれあい、公的機関を利用するときのマナーを感じ取ってもらうといった点についても、図書館を通して体験してもらえれば、と願っている。もちろん、市立保育園とも市の保育課を通して同様の支援が実施されている。

島松小学校学校司書の中山さんは、「読み聞かせをしても、子どもたちがとても集中して興味を持って聞いてくれている。これはブックスタートにはじまり、家庭や幼稚園での読み聞かせ活動が充実しているからだと思う。今後も学校図書館や市立図書館の利用を通して、大人になってからも本とかかわっていくことができるのはすごくいいこと」と市の施策を評価する。間近で読書活動の様子を見ている現場の側からも、子どもたちの成長という「縦のつながり」を意識した関係機関の横断的な取り組みが、しっかりと子どもたちのもとへ届いていることを実感している。そして、こうした横断的な取り組みが可能となった背景には、学校図書館を包括した図書館行政、もっといえば、恵庭で生まれた子ど

もが、大人になるまでのすべての読書環境を引き受ける図書館行政の姿があったのである。

IV 「実践コミュニティ」をつなぐ図書館行政

こうした恵庭市の実践は、これからの子どもの読書を支える図書館行政において、一つの到達点といえる。恵庭市には、それぞれの場面でリーダーシップを発揮したキーパーソンが存在した。その中心は、ときには市立図書館であったり、市民や学校関係者、行政職員などであったが、そうしたキーパーソンに賛同した人々、いわばコミュニティが、まち全体での子どもへの豊かな読書支援をダイナミックな運動へと発展させ、取り組みの積極的な推進へと導いていた。たとえば、ブックスタートをきっかけにした市立図書館、保健師、子育て支援部局、ボランティアによるコミュニティ、学校司書と市立図書館職員によるコミュニティ、読み聞かせボランティアというコミュニティ、ボランティア同士のコミュニティ…、などにみることができる。こうしたコミュニティは、恵庭市の実践において大変重要な構成要素をなしていた。それぞれのコミュニティは、「子どもへの豊かな読書支援の実践」という共通の主題を持った人々が、自分の経験や専門的な知識を持ち寄り、共有し、実践に活かそう、発展させようという目的のもとに集まって構成されている。これは、「実践コミュニティ」と呼んでいいのではないだろうか。

「実践コミュニティ (Communities of Practice)」とは、アメリカの人類学者であったエティエンヌ・ウエンガーと人工知能研究者のジーン・レイブによって提唱された概念である。「状況的学習」という学習理論を展開した際にはじめて用いられた概念だったが、近年では経営学の分野でも注目を集めている。

ウエンガーらによれば、「実践コミュニティ」は、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団 (ウエンガー2002: 33)」である。「実践コミュニティ」は新しい概念ではなく、昔からどこにでも存在しているといわれる。さらに「実践コミュニティ」は、「暗黙知と形式知を結び合わせることができるため、知識を体系化する役目を担う (ウエンガー2002: 40)」とされている。暗黙知とは、「複雑で相互依存的な物事の本質に対する深い理解 (ウエンガー2002: 40)」であると定義され、知識の文書化といわれる形式知でさえ、暗黙知がなければ適用することはできないという。知識の資産こそが成功につながるといわれる昨今の知識経済において「実践コミュニティ」が重宝されるのは、そのためである。つまり、「実践コミュニティ」は、そのテーマに関心を持つ人々がそれぞれの持っている知識を共有し、蓄積し、そしてまた新たな知識を生み出す集団であるといえることができる。

ウエンガーは、「実践コミュニティ」の基本的な構造として、「一連の問題を定義する知識の領域」^{ドメイン}、「この領域に関心を持つ人々のコミュニティ」、「領域内で効果的に仕事をするために生み出す共通の**実践**」^{プラクティス}という三つの基本要素を挙げ、これらのユニークな組み合わせから「実践コミュニティ」は成るとしている (ウエンガー2002: 63)。

恵庭市の実践をみてみると、「領域」は、「子どもへの読書支援」あるいは「まち全体の豊かな読書活動」などに置き換えることができる。どのコミュニティにおいても、「読書コミュニティのまち」という理想のもと、それぞれの課題を構成員の間で共有していた。む

しろ、それぞれの共有する課題の改善や解決こそがコミュニティ発生の原点であった。ウェンガーは「領域に対するコミットメントのないコミュニティは、友人同士のグループに過ぎない。メンバーは領域を共有することで、一連の知識に対する責任感を覚え、その結果、責任を持って実践を生み出すようになる（ウェンガー2002：66）」と、領域を共有することの重要性を主張している。

「コミュニティ」は「この領域に関心を持つ人々」だと定義されていたが、それは恵庭市の場合、学校司書や保健師、子育て支援の関係者、ボランティア、図書館職員など、そのほか多数の人々が当てはまるだろう。いくつものコミュニティに、それぞれの人々がかかわっている。「自発的にアイデアを共有し、無知を露呈し、厄介な質問をし、注意深く耳を傾けよう（ウェンガー2002：64）」とする豊かな関係がコミュニティにおいて大変重要だとウェンガーは指摘するが、たとえば、ブックスタートまでの準備段階や学校司書配置に向けた運動などでこうした関係をみることができる。

最後に、「領域内で効果的に仕事をするために生み出された実践」である。ウェンガーは「実践」を「コミュニティが生み出し、共有し、維持する、特定の知識（ウェンガー2002：64）」と、より具体的に定義した。恵庭市においても、それぞれの活動のなかで、互いの経験から生まれた知識や情報を共有し、より良い子どもの読書支援への取り組みに向けて、新たな知識を生み出していたといえる。

子どもの読書支援という目標を通して、このような「実践コミュニティ」が恵庭市の場合はいくつも存在していた。市立図書館が中心となっている「実践コミュニティ」もあれば、かかわっていないところで自然発生的に生まれた「実践コミュニティ」もあった。恵庭市の「読書コミュニティのまち」に向けた施策も、こうしたいくつもの「実践コミュニティ」による活動が重なり合って発展していったということができる。地域の「実践コミュニティ」はいまや欠かすことのできない構成要素をなしている。

そして、これら地域の「実践コミュニティ」を、より体系的な子どもの読書支援としてつなげていくために、恵庭市においては、学校図書館を市立図書館が包括する図書館行政の一元化が大きな転換点となっていた。

地域で生まれた子どもの読書環境を、その成長過程を考慮して、各ライフステージに合わせて整備しようとしたとき、家庭や学校、地域に向けた支援が必要となる。図書館に来館した利用者、この場合子どもへの対応は基本ではあるが、しかしそれだけでは、その成長過程に寄り添う支援は実現できない。来館者に限らず、公的かつ公平に幅広い支援をすすめていくためには、家庭や学校、地域といったさまざまな領域に対して働きかけることが重要であり、そのためには、市立図書館と、そのほか複数の行政部局をまたがった連携が求められるのである。

恵庭市においても、義務教育段階の子どもの読書支援にあたり、学校図書館の整備充実が重視された。「わかくさマザーグース」や「学校図書館を考える会・恵庭」といった、いわば地域の「実践コミュニティ」の活動が、その後の施策につながっていったが、その施策の継続と発展において、専門的な市立図書館からの支援が大きな役割を担っていた。そしてそれは、社会教育部局である市立図書館が学校教育部局である学校図書館を包括する図書館行政の一元化がはかられたことにより、物的整備にとどまらない、より豊かな支援へと実現されていったのである。学校司書を配置しただけでなく、学校司書が各学校にお

いて積極的な子どもの読書支援にのぞめるように、市立図書館が支える体制が整えられた。これは、学校図書館を通して義務教育段階の子どもたちに支援を届けたかった市立図書館側の思いと、市立図書館からの専門的な支えのうで学校図書館の充実につなげたかった学校及び学校司書の思いが結実したかたちであるといえる。

このように、恵庭市の図書館行政の一元化は、本来的には、社会教育部局である市立図書館と、学校教育部局である学校図書館という二つの異なる行政機構の再編を指しているが、しかし、それによって、市内の読書環境整備が体系的にすすめられるきっかけとなった点で、さらに大きな意味を持っていた。この一元化から、市内全域にわたる読書支援の中核をなし、事務局的角色として市立図書館が位置づけられるに至ったのである。

たとえば、幼稚園や保育園といったそれぞれの施設においても、そこでの直接的な子どもの読書支援を尊重しながら、それを支える場として市立図書館が機能していた。幼稚園を運営する民間企業や、保育園を所管する保健福祉部局といった行政的な枠組みを乗り越えることができたのは、図書館行政の一元化によって市立図書館による読書支援の体系化が整っていたからだろう。また、一元化をきっかけに、市内の読書関係ボランティアをつなぐコーディネーター役を市立図書館が担うこととなり、それによって、学校図書館ボランティアと読み聞かせボランティアとのつながりや、子育て支援部局と読み聞かせボランティアとのつながりが生まれている。

つまり、恵庭市における、学校教育部局である学校図書館と社会教育部局である市立図書館という行政部局を超えた行政の一元化は、それ自体に意義があっただけでなく、市内の読書支援を体系化し、安定的かつ継続的な施策へと発展させ、さらに、それによってさまざまな領域とのつながりを導いた点に、大変重要な意義を持っていたといえる。

近年では、子ども施策をめぐる縦割りの行政による弊害を克服するため、「子ども行政一元化」の必要性が求められている。恵庭市にみられる図書館行政の一元化は、こうした動きを後押しするものであろう。

しかし、ただ単に図書館行政の一元化をはかればよいといった単純な問題ではない。恵庭市から学ぶべき点として、最も重要なことは、地域に存在するいくつもの「実践コミュニティ」とつながりながら、子どもを中心とした「横のつながり」と「縦のつながり」を意識した支援をすすめるようとした結果、図書館行政の一元化にたどり着いたことである。

つまり、市内全域にわたる子どもの読書ひいては市民の読書環境整備を隔々にまで行き渡らせようとしたとき、それぞれの「実践コミュニティ」による働きは非常に大きい。子どもへの直接的な支援を担うのは、地域に存在する、このような「実践コミュニティ」なのであり、彼らが機能しなければ、豊かな読書支援をすすめることはできないだろう。図書館行政の外側にある、こうした「実践コミュニティ」による活動が、自立的で積極的に実践的におこなわれなければ、子どもの読書環境全体に行き届いた支援の実現が困難なのである。そのため、彼らの自由な活動を保障し、支えていくことが重要であり、また、そうした活動をそのままにはせず、「横のつながり」と「縦のつながり」のなかで、体系的な支援として継続、発展させていくことが重要となってくる。そして、恵庭市では図書館行政の一元化という行政の再編によって「縦のつながり」をもった読書支援をすすめ、またそれによって新たな行政部局を超えた結びつきの発展にもつながっていったのである。

その地域に暮らす子どもへの全体的な支援において、公的な力を持つ行政は多大な影響

力を持っている。これからの図書館行政及び教育行政においては、地域の「実践コミュニティ」が果たす重要な役割を十分に認識したうえで、一方でそれらを支えながら、総合的な、子どもへの支援を実践していかなければならない。恵庭市においては、それぞれの「実践コミュニティ」の働きと、それを支え体系的な支援へとつなげた図書館行政の一元化という行政機構の再編が、どちらも欠かすことのできない要素として、両輪となって機能していた。「実践コミュニティ」同士のつながりや、「実践コミュニティ」と行政機構とのつながりといった各種の結びつきが図書館を中心に営まれており、子どもの読書支援を軸にして一つの共同体を形成している。ここに、まさに「読書コミュニティ」という大きな「実践コミュニティ」の存在を確認することができ、子どもの読書を支える総合的な図書館行政が構築されたといえるのではないだろうか。

おわりに

本論文の研究課題は、一つに子どもにとって身近な図書館の行政を教育学的見地から再検討することであり、その際に、「横のつながり」と「縦のつながり」を意識した子どもの読書環境全体を考察することが、二つ目の研究課題であった。自身の研究課題に対し、「実践コミュニティ」を意識した図書館行政の一元化という新たな視座の提起により、一定程度応えることができたと考える。

最後に、2007年の北海道新聞に掲載された恵庭市の小学校6年生の女の子による「私のまち自慢」を紹介したい。

私のまち自慢：「すべての小学校に司書」

私の住んでいる恵庭市のすばらしいところは、なんといっても学校図書室（館）。市内八つの小学校すべてに司書さんがいて、私たちにオススメの本を教えてくれるのです。

わかりやすく並べられた本だな。きれいでしずかなへや。市がお金を出して、図書室をじゅうじつさせているそうです。

私はもともと本が好きです。やはり本を読む環境は良い方がうれしいので、ちょっとオーバーな言い方かもしれませんが、感動しました。

もちろん市立図書館もじゅうじつしています。本好きな人は、恵庭市にぜひいらしてください。

（北海道新聞 2007 年 4 月 12 日）

なによりも、その地域で生まれ、そこに暮らす子どもたちが、いまの読書環境を必要としている。図書館を中心にした子どもの読書支援の発展と継続は、こうした子どもたちの思いにこそ支えられているのである。

謝辞

これは平成 23 年度に北海道大学大学院教育学院に提出した修士論文をもとに執筆したもの

である。文中のインタビュー調査は2009年11月から2011年9月にかけて実施した。なお、記載されているインタビュー対象者の肩書きはすべて調査時点のものである。

調査にご協力いただいた、恵庭市立松恵小学校長の樋口賢治様、同校学校司書の松田絵里香様、恵庭市立図書館図書課長の内藤和代様、「えにわゆりかご会」事務局長の平井立様、恵庭市立島松小学校学校図書館ボランティア「たんぽぽ」の皆さま、同校学校図書館司書の中山様、恵庭市立恵み野小学校教員の飯坂直子様、同校学校司書の吉田蔭衣様には、貴重な時間を割いてインタビューをお引き受けいただいたことに、心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞にかえさせていただきます。

参考文献及び参考資料

- ・ 赤星隆子（1990）「今澤慈海の児童図書館論－英米文献との関係を軸とした一考察－」『図書館学会年報』第36巻第4号
- ・ 荒牧重人ほか（2004）『子どもにやさしいまちづくり－自治体子ども施策の現在とこれから』日本評論社
- ・ 五十嵐絹子（2006）『夢を追い続けた学校司書の四十年』国土社
- ・ 伊藤崇ほか（2004）「状況論的学习観における「文化的透明性」概念について：Wengerの学位論文とそこから示唆されること」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第93号
- ・ 今澤慈海（1920）「公共図書館の使命と其達成」『図書館雑誌』第43号
- ・ 今澤慈海（1921）「公共図書館は公衆の大学なり」『市立図書館と其事業』第1号
- ・ 今澤慈海（1921）「通俗図書館及通俗読み物」『社会教育講演集』地方行政学会
- ・ 今澤慈海（1923）「読書趣味の養成と師範学校」『其事業』第13号
- ・ 今澤慈海（1925）「都市に於ける教育の中心としての図書館」『社会教育』第2巻第11号
- ・ 今澤慈海「図書館」（1938）『教育学事典』第3巻，岩波書店
- ・ 今澤慈海、竹貫直人（1918）『児童図書館の研究』博文館
- ・ 岩崎れい（2010）「子どもの読書に関する教育学的研究」『子どもの情報行動に関する調査研究』国立国会図書館
- ・ 岩猿敏生（2007）『日本図書館史概説』日外アソシエーツ
- ・ 岩猿敏生ほか編（1984）『新・図書館ハンドブック』雄山閣
- ・ ウェンガー，エティエンヌ（2002）『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社（原著 Wenger, Etienne., (1998) *Communities of Practice : Learning, Meaning, and Identity*. Cambridge University Press.）
- ・ 恵庭市立図書館情報（2007）
- ・ 恵庭市立図書館情報（2008）
- ・ 恵庭市立図書館のあらまし（2011）
- ・ 恵庭市（2011）「第3期恵庭市生涯学習基本計画」
- ・ 恵庭市（2006）「第4期恵庭市総合計画」
- ・ 恵庭市（2010）『日本一の読書のまちをめざして～恵庭市と市立図書館の活動～』紀伊國屋書店（DVD）
- ・ 恵庭市（2007）『まちを耕す 恵庭要覧 IZA』

- ・ NPO ブックスタート編著（2010）『赤ちゃんと絵本をひらいたら』岩波書店
- ・ 大串夏身（2008）『読書と図書館』青弓社
- ・ 嘉数朝子（2004）「家庭での読書環境が心の理論の発達に及ぼす効果」『琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要』第6号
- ・ 梶浦真由美「絵本から広がる子育て支援－恵庭市ブックスタート追跡調査結果を通して」
- ・ 梶山雅史（2005）「教育会研究文献目録Ⅰ」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第53集第2号
- ・ 潟沼誠二ほか（2003）『司書教諭のための学校図書館概論（改訂版）－図書館が変わる・学校が変わる』翰林書房
- ・ 草野正名（1966）『図書館の歴史－日本及び西洋の図書と図書館史』学芸図書株式会社
- ・ 國枝裕子（2006）「今澤慈海の学校図書館論」『神戸大学発達科学部研究紀要』第14巻第1号
- ・ 国立教育政策研究所（2009）『社会人の読書行動に関する調査』
- ・ 財団法人出版文化産業振興団（2009）『読書実態と意識に関する調査』
- ・ 財団法人日本経済研究所（2005）『親と子の読書活動に関する調査』
- ・ 坂田仰（2004）『教育改革の中の学校図書館－生きる力・情報化・開かれた学校』八千代出版
- ・ 坂田仰ほか（2007）『学校図書館の光と影－司書教諭を目指すあなたへ』八千代出版
- ・ 坂本一郎（1977）『私の読書学遍歴』学芸図書
- ・ 塩見昇（2000）『学校図書館職員論』（株）教育史料出版会
- ・ 塩見昇ほか（2005）『図書館ハンドブック第6版』（社）日本図書館協会
- ・ 塩見昇ほか（1988）『日本における図書館行政とその施策』日外アソシエーツ株式会社
- ・ 児童図書館研究会編（2004）『児童図書館の歩み－児童図書館研究会50年史』株式会社教育史料出版会
- ・ 社団法人全国学校図書館協議会（1997）『学校図書館の法規・基準第2版』社団法人全国学校図書館協議会
- ・ 生野金三ほか（2007）「ブックトークの実践に関する研究」『白鷗大学論集』第21巻第2号
- ・ 全国学校図書館協議会（2009）『第55回学校読書調査』
- ・ 全国学校図書館協議会（2010）『第56回学校読書調査』
- ・ 全国学校図書館協議会（2011）『第57回学校読書調査』
- ・ 高木光太郎（1992）「『状況論的アプローチ』における学習概念の検討－正統的周辺参加概念を中心として－」『東京大学教育学部紀要』第32巻
- ・ 高橋登（1999）『子どもの読み能力の獲得過程』風間書房
- ・ 中村百合子（2009）『占領下日本の学校図書館改革－アメリカの学校図書館の受容』慶應義塾大学出版会
- ・ 日本図書館協会図書館調査事業委員会編（2010）『日本の図書館 2009 統計と名簿』日本図書館協会
- ・ 日本図書館研究会編集委員会編（2006）『子どもの読書環境と図書館』日本図書館研究会
- ・ 福田誠治（2006）『競争やめたら学力世界－フィンランド教育の成功』朝日新聞社
- ・ 横井敏郎・辻村貴洋・篠原岳司他（2008）「現代自治体子育て・教育行政の調査研究－「子

どもが健やかに育つまち」をめざす恵庭市」北海道大学大学院教育学研究院教育行政学研究グループ『公教育システム研究』第7号

- ・ 細谷重義ほか編（1980）「今沢慈海著作年表（稿）」『ひびや』第130号
- ・ 前川恒雄・石井敦（2006）『新版図書館の発見』日本放送出版協会
- ・ 松本大（2006）「状況的学習の成人教育」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第55集第1号
- ・ 文部科学省（2007・2008・2009）『全国学力・学習状況調査』
- ・ 山梨あや（2003）「今沢慈海の生涯教育論」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第57号
- ・ 山梨あや（2011）『近代日本における読書と社会教育』法政大学出版局
- ・ 山本順一ほか（2002）『学校経営と学校図書館』学文社
- ・ 吉田右子（2010）『デンマークのにぎやかな公共図書館－平等・共有・セルフヘルプを実現する場所－』新評論
- ・ 米谷優子（2007）「子どもの読書活動推進計画に見る読書概念の分析と比較検証」『2007年日本図書館情報学会春期研究集会発表要綱』
- ・ レイブ, ジーン & ウェンガー, エティエンヌ（1993）『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加』産業図書（原著 Jean Lave & Etienne Wenger. (1991) *Situated learning : legitimate peripheral participation*, Cambridge [England] ; New York : Cambridge University Press.）